書評

木村英明著『シベリアの旧石器文化』（北大図書刊行会　一九九七年）を読む

加藤博文

私たちは誰であるのか。そしてどこからきたのか。このような主題は自分探しと重なり、時代や世代を問わず人々の関心を集めてきた。しかし、自分が一体何者であるのか、そして自分の帰属する集団がいかに形成されてきたのかという課題は、自らの個性を強調したり独自性を強調したりすることによって、緩やかに自らを包む周囲との関係態を見落としてしまう場合が多い。

近年の日本列島における人類史研究は、これまでの列島内部の文化の特殊性や独自性を強調する流れのみではなく、より広い地域史的な視点から見直していく必要性を指摘する流れが起きつつある。海に囲まれたこの東アジアの島嶼地帯の人類史は、常に海によって大陸と結ばれ歴史と文化を育んできた。このような視点から列島の人類史をより大きな地域史として「北東アジア史」「ユーラシア史」として見直そうという動きも出てきつつある。列島内部における人々の生活文化の動態も大陸における人々の生活の動きと連動して捉え、より大きな視点からの位置付けや解釈が求められてきているのである。そのような日本列島を取り巻く周辺地域としては、中国大陸そして朝鮮

半島から日本海を隔てたシベリア地域がある。これらの周辺地域に中でも我々にとって近くて遠い印象を与えてきた地域はシベリア地域であろう。

シベリア地域は、南北に長くユーラシア大陸の東端に位置する日本列島にとって北海道、サハリンという二つの大きな島の先に広がる北の大地である。通常、我々がこの地へ抱くイメージは、寒く凍てつく大地であり、先の大戦とのかかわりでは五年という長きにおいて多くの人々が抑留され強制労働に従事した地というイメージがすぐに想起される土地である。我々にとっては、むしろネガティヴなイメージの強いシベリアであるが、人類史においては人類が寒冷環境への適応を遂げた地として、ウマを操り草原を遊牧民族が駆け抜けた地として多くの人類遺産をその懐に抱いた研究フィールドとして魅力的な地でもある。このような人類史上の重要性が指摘される一方、長くソヴィエト政権下において自由に海外の研究者が調査することもままならず研究成果の公開が遅れてきた。一九九一年のソ連邦の崩壊は、この状況を一変させ、現在では各国の研究者が自由に往来し、数多くの新知見が報告され、活発な研究活動が進められている。

木村英明氏による『シベリアの旧石器文化』は、ソ連邦崩壊以前のロシア人以外の研究者による調査研究活動が困難であった時期からの丹念な資料観察を積み上げてきた研究成果をまとめたものである。本書においては、著者自身の観察を通じた記載による豊富な旧石器時代の資料を駆使して、シベリア地域への人類の進出過程が描き出されている。

構成は、シベリア地域の旧石器時代の研究史を詳述した第1章にはじまり九つの章をなす九本の論考からなっている。その中身は、五十万年に遡る可能性をもつシベリアへの人類の進出過程の検証から中央アジアや西アジアと

の交流の可能性も指摘される八万年まえから五万年前のムステリアン石器群の位置付け、そして中国北部や朝鮮半島をも含む北アジア地域を席巻する細石刃石器群の評価、北海道の旧石器文化と大陸との関係にも及ぶ。すべて著者による観察に基づいた研究が蓄積された成果であるが、中でも多くの新たな知見と詳細な分析と考察を含んでいる部分として「マンモスハンターの遺跡」と銘打たれた第6章を指摘できよう。この部分は、中部シベリアに位置する世界的にも著名な旧石器時代の遺跡であるマリタ遺跡の考察を主としてまとめられている。この遺跡はその国際的な史料価値の高さに比して、詳細な全体像が不明であったものである。著者は、これまでの断片的な報告を集成し、マリタ遺跡を遺した人々の生活と文化の総合的な復元を試みている。ここにおいて資料を積み上げ考察していく中で先史時代の集落像が復元されていく過程は、まさに先史考古学の醍醐味といえよう。

本書は、すでに一九九七年に出版されている。出版直後から考古学界においては長く詳細な資料が提示されてこなかったシベリアの旧石器文化を通覧した優れた研究書として高い評価が下され、シベリアにおける研究事情や北アジア考古学に関心を抱く多くの研究者が手に取ってきた。評者もその一人である。本書の学術的の評価については一九九七年の出版以来多くの考古学専門家による的確な書評もなされてきている。ここに評者が屋下に屋を架す必要はないであろう。

敢えてここで取り上げたのは、本書を読むとき、その豊富な考古学情報に感嘆しつつ、さらにこの研究がまとめられる過程において築き上げられた筆者と現地の研究者との深い信頼関係と友情を強く感じずにはいられないからである。人に関連する学問においては、研究者間そして調査において関わる人々との関係の築き方が研究自体に大きな影響を及ぼす。単に個人の好奇心という欲求を満たそうとするだけの自己完結型の研究では、異なる評価も生

じる可能性のあるこの種の研究資料を共有しながら研究活動を継続することは困難である。本書の中においても著者によって触れられているが、著者が体験したシベリアにおけるフィールドワークにおける人との出会い、そして人間関係のとつながりが本書の研究をより豊かに仕上げてくれていると言える。

本書が実践し、提示してくれているものは、文化や歴史の国境を超えた共同作業のひとつの姿であり、将来的な可能性である。人類にとって共通の文化遺産である歴史資料をどのように扱っていくのか。いかにして共通の課題を周辺諸国の研究者と共同で研究していくのか。本書において著者が実践し、提示した国際交流のあり方から示唆を受けるものは数多くある。

なお、本書は第七回雄山閣考古学特別賞を受賞している。

（考古学・北海道大学大学院文学研究科北方文化論講座助教授、本学非常勤講師）